小学校国語　第３学年　単元名「『自然のかくし絵紙しばい』をつくろう」

考える楽しさ，必要感や切実感を生む課題設定の工夫

～働かせるべき「見方・考え方」に子ども自ら気付く単元づくり～

教師から一方的に課題が提案され，子どもにとっての必然性，意欲や期待感を抱かせないまま学習が展開されてはいませんか？

本実践では，単元の導入で課題解決の見通しをもつために，働かせるべき「見方・考え方」に気付けるような導入の工夫をしました。教師から課題を提示するのではなく，教材との対峙を通して，子ども自身が自分の課題として見いだしていけるように指導の改善を図ることが大切です。

写真と教材文が一覧できるような教材

自然のかくし絵

①木のみきにとまったはずのセミや，草のしげみに下りたはずのバッタを，ふと見うしなうことがあります。

②セミやバッタは，木のみきや草の色と見分けにくい色をしています。まわりの色と見分けにくい体の色は，てきから身をかくすのに役立ちます。身をかくすのに役立つ色のことをほご色といいます。

③こん虫は，ほご色によって，どのようにてきから身をかくしているのでしょうか。

④たとえば，コノハチョウの羽は，表はあざやかな青とオレンジ色ですが，うらは，かれ葉のような色をしています。それに，羽をとじたときの形も木の葉そっくりです。そのため，木のえだにとまっていると，えだにのこったかれ葉と見分けがつきません。

⑤また，トノサマバッタは，自分の体の色がほご色になるような場所をえらんですんでいるようです。トノサマバッタには，緑色のものとかっ色のものがいます。野外で調べてみると，緑色の草むらにいるのは，ほとんどが緑色のバッタで，かっ色のかれ草や落ち葉の上にいるのは，ほとんどがかっ色のバッタです。

⑥さらに，まわりの色がへんかするにつれて，体の色がかわっていくこん虫もいます。ゴマダラチョウのよう虫は，エノキの葉を食べて育ちます。秋になり，エノキの葉が黄色くなるにつれて，この虫の体の色も，だんだん黄色にかわっていきます。

⑦このほかにも，ほご色によって上手に身をかくして，てきから身を守っているこん虫はたくさんいます。

⑧では，こん虫は，どんなときでもてきから身を守ることができるのでしょうか。

⑨こん虫を食べる鳥やトカゲなどが色を見分ける力は，人間と同じくらいです。ですから，こん虫のほご色は，人間の目をだますのと同じくらいに，これらからのてきの目をだまして身をかくすのに役立っていると考えられます。

⑩こん虫をかんさつしてみると，一日のうちのさまった時間だけ活動し，ほかの時間はじっと休んでいます。多くのこん虫は，この長い時間休む場所の色に，にた色をしています。じっとしているかぎり，ほご色は，身をかくすのに役立ちます。

⑪ところが，こん虫が自分の体の色と同じような色をした所にいたとしても，動いたときなどには，鳥やトカゲに食べられてしまうことがあります。鳥やトカゲなどは，ちょっとした動作を見のがさない，するどい目を持っているからです。

⑫このように，ほご色は，どんな場合でも役立つとはかぎりませんが，てきにかこまれながらこん虫が生きつづけるのに，ずいぶん役立っているのです。ほご色は，自然のかくし絵だということができるでしょう。

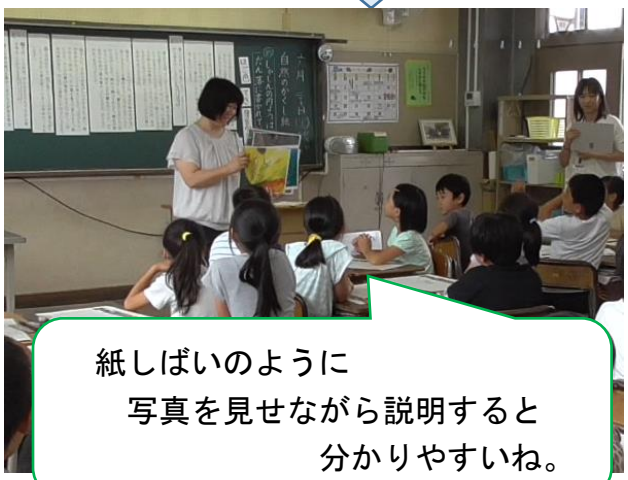
写真があると
分かりやすいなあ。

写真のことを説明している段落と
そうでない段落があるよ。

ポイント！

写真と関連付けた説明の分かりやすさを実感できるように，「写真と教材文が一覧できるような教材」を提示し，どの文が，どの写真の説明になっているかを考えさせた。

写真と文章を関連付けると分かりやすくなることを知った子どもたちは，下級生に説明するには，写真を使って，「紙芝居のようにして，説明するとよいのではないか」と自ら必要感のある課題を設定することができた。



紙しばいのように
写真を見せながら説明すると
分かりやすいね。

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善のポイント

教師側から課題を提示するだけではなく，子どもたちの課題意識を高めることがポイントです。教材文の内容や構成を基にしながら，単元を通して追究していく言語活動とその方法を，自分たちで見いだしていくように工夫し，子どもにとって自分事となるよう，質の高い課題へと導いていきましょう。